

【研究ノート 12】

阿難が登場し釈尊が登場しない経の説時推定

森 章司

[0] 本稿は標題のごとく「阿難が登場して」「釈尊が登場しない」経の説時を推定しようとするものである。

ここに「阿難が登場する」というのは、阿難が点景として、あるいは多人数の比丘たちの1人として列記されるのではなく、それなりの役割を持って登場するものである。

「釈尊が登場しない」というのは、本文中に釈尊が登場しないものであって、経の冒頭に世尊はどこそこにおられたという「仏在処」の記述があっても、実際の経文中には釈尊が登場されないものも含む。

このような論稿を書こうとする直接的な動機は、標題が示しているように、このような経の説時を推定するためである。もっと直截的にいえば、このような経は仏滅後の経ではないかという問題意識があるからである。また付带的には、仏在処が記されていないながら実際には釈尊が登場されない経をどのように理解すべきかということもある。

[1] 上記のような、「阿難が登場して」「釈尊が登場しない」経を紹介することから始める。経の紹介は阿難の住処をもとに、事例数の多いものから少ないものへの順序とする。

なお以下にはパーリの経を中心に、その漢訳の対応経と相応経を1つのグループとして括り、そうでないグループの間には行間を設けた。パーリとその漢訳対応経・相応経の相互間で、阿難の在処が異なる場合があるが、その場合はパーリの記述を優先した。もちろん経の内容の紹介のところでは、異なる漢訳の阿難住処はそのまま残してある。

なお仏在処の記述のあるものはその個所に太い下線を施し、阿難や他の仏弟子の住処には細い下線を施した。また人名は**太字**とし、注意していただきたい記述には破線の下線を施した。

[1-1] コーサンビーを阿難住処とするもの

MN.076 *Sandaka-s.* (サンダカ経 vol. I p.513、南伝 10 p.358、片山・中部 4 p.031) : あるとき世尊はコーサンビーのゴーシタ園 (Ghositārāma) に住された。そのとき**サンダカ**という**遊行者** (Sandaka paribbājaka) が 500 人の遊行者とともピラッカ窟 (Pilakkhaguhā) に住していた。夕刻、**アーナンダ**はピラッカ窟を見に多数の比丘とともにデーヴァカタソッパ (Devakaṭasobbha) 沼に出掛けた。このときサンダカは大勢の遊行者と大声で雑談していたが、アーナンダがやって来るのを見て静まれと指示し、アーナンダに法を説くことを要請した。アーナンダは、「世の中にはさまざまな宗教指導者 (satthar) があります。①布施なく、供犠なく、供養の功德はないと説く者、②いかなる行いにも果報はないと説く者、③煩惱が起こるには因も縁もないと説く者、④地・水・火・風・楽・苦・命という7つの要素は不変であると説く者、⑤自分の行住坐臥には常に知見があると説く者、⑥自分は伝聞 (anussava) により、

伝説・伝承 (itihītiparamparā) により、聖典 (piṭakasampadā) によって説法すると説く者、⑦ナマズのようなとらえ難き論をなす者などです。世尊はこれらは梵行 (brahmacariya) ではないと説かれています。世尊は MN.051 *Kandaraka-s.* に説かれているような教を説かれています。そして殺生してはならない、偷盗してはならない、邪淫してはならない、妄語してはならない、在家者のように欲を受用してはならない、との5つの事柄 (pañca ṭhāna) を説かれました」と説いた。これを聞いてサンダカは、「あなたは自分をほめず他を謗らない、そしてこの法と律には500人の余も先達 (niyyātar) があるという。しかるに邪命外道は自讃し他を譏り、**ナンダ・ヴァッチャ (Nanda Vaccha)**、**キサ・サンキッチャ (Kisa Saṅkicca)**、**マツカリ・ゴースーラ (Makkhali Gosāla)** という3人の先達があるのみです」と言い、自分の衆に向かって「沙門ゴータマには梵行住がある (samaṇe Gotame brahmacariya-vāso)、彼のもとへ行け」と告げ、自分の衆 (saka parisā) を世尊の梵行のもとへ赴かせた (uyyojesi bhagavati brahmacariye)。

『雑阿含』973 (大正02 p.251中、国訳03 p.497) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住され、**阿難**も一緒であった。そのとき阿難のもとに**栴陀**という**外道の出家者**がやって来て、「どうしてあなたは沙門瞿曇のもとで出家して梵行を修しているのですか」と質問した。阿難は「食欲と瞋恚と愚癡を断ずるため、それを断ずる道は八正道 (正見、正思、正語、正業、正命、正方便、正念、正定) である」と答えた。栴陀外道は「これこそ賢聖の道である。これを修習すれば食欲と瞋恚と愚癡を断じらる」といい、阿難の所説を歡喜して去った。

『別訳雑阿含』207 (大正02 p.451上) : そのとき**阿難**は拘睺弥国の瞿師羅園に住していた。そのとき**聞陀**という**梵志**が阿難のもとにやって来て、「どうしてあなたは沙門瞿曇のもとで出家学道しているのですか」と尋ねた。阿難は「悪を断じ、善を生じさせんがためです。悪とは食欲、瞋恚、愚癡であり、それを断ずる道が八正道です」などと説いた。聞陀は「用事があるから」と言って、阿難の所説を歡喜してその場を立ち去った。

『雑阿含』783 (大正02 p.202下、国訳02 p.260) : あるとき世尊は俱睺弥国の瞿師羅園 (1)に住された。そのとき**阿難**も住していて、彼のもとに**異婆羅門**がやって来て、「あなたはどのようにして沙門瞿曇のもとで出家して梵行を修しているのですか」と質問した。阿難は「食欲と瞋恚と愚癡を断ずるため、そのために八正道があります」と答えた。婆羅門は「それは賢聖の道である。これを修習すればよく食欲と瞋恚と愚癡を断ずるであろう」と言い、阿難の所説を歡喜して去った。

(1) 『雑阿含』にはコーサンビーを音写するのに、「拘睺弥」とする場合と「俱睺弥」とする場合の両様がある。本稿では大正藏経の表記そのままを採用した。

SN.051-015 (vol.V p.271、南伝16下 p.122) : あるとき**アーナンダ**はコーサンビーのゴースタ園に住していた。そのとき**ウンナーバ婆羅門 (Uṇṇābha brāhmaṇa)** がやって来て、「あなたはどのようにして沙門ゴータマのもとで梵行を修しているのですか」と質問した。アーナンダは「欲を断ずるためです」と答え、欲を断ずる道 (四神足、即ち①欲三摩地勤行成就の神足、②勤三摩地勤行成就の神足、③心三摩地勤行成就の神足、

④観三摩地勤行成就の神足)を解説した。この教えを聞いたウンナーバ婆羅門は三宝に帰依して優婆塞となった。

『雑阿含』561(大正02 p.147上、国訳02 p.147) : あるとき世尊は俱睺弥国の瞿師羅園に住された。そのとき阿難も住して、彼のもとに異婆羅門がやって来て、「あなたはどうして沙門瞿曇のもとで梵行を修しているのですか」と質問した。阿難は「愛を断ずるため、その道は四如意足(欲定断行成就如意足、精進定断行成就如意足、心定断行成就如意足、思惟定断行成就如意足)を修することです」と答えた。婆羅門は阿難の所説を歡喜奉行した。

SN.012-068(vol.II p.115、南伝13 p.167) : あるときムシーラ(Musila)とサヴィッタ(Savitṭha)とナーラダ(Nārada)とアーナンダがコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときサヴィッタがムシーラに「生に縁りて老死あり……無明に縁りて行あり、生が滅するから老死が滅し、……無明が滅するから行が滅するとの智があるか」と質問すると、「ある」と答えた。そこでサヴィッタが「ムシーラは阿羅漢であり、漏尽者である」と言ったが、ムシーラは黙然としていた。

これを聞いていたナーラダはサヴィッタに同様の質問を自分にさせ、ナーラダは「その智があるが、しかし自分は阿羅漢ではなく、漏尽者ではない」と答えた。

このときアーナンダはサヴィッタに、「あなたはナーラダに何と言うか」と質問した。サヴィッタは「私はナーラダに、徳と善とを除いて何も言わない」と答えた。

『雑阿含』351(大正02 p.098下、国訳01 p.317) : あるとき那羅と茂師羅と殊勝と阿難が舎衛国の象耳池の側にいた。そのとき那羅が茂師羅に、「生あるが故に老死あり、生を離れては老死あらず、という知見があるか」と質問すると、茂師羅が「ある」と答えた。そこで那羅が茂師羅に、「それならばあなたは阿羅漢で、漏が尽きているのか」と質問すると、茂師羅は黙然としていた。

そのとき殊勝が「私が代って那羅に答えよう」といって、自分に同じ質問をさせ、「私にもそのような知見があるが、私は漏尽の阿羅漢ではない。曠野に井戸があっても、縄や缶がなければ水を取れないようなものだ」と言った。

これを聞いていた阿難が那羅に「殊勝の所説を、あなたはどのように思うか」と尋ねると、那羅は「彼は真実を知っているという以外には何もものもない」と答えた。彼ら正士は各々説き終わって、座より立って去った。

SN.022-090(vol.III p.132、南伝14 p.207) : あるとき多数の比丘がバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤ(Isipatana Migadāya)に住していた。そのときチャンナ(Channa)が夕暮れ時に鍵を持ち、精舎をへめぐって長老比丘たちに教えを聞いて回っていた。そこで長老比丘たちは彼に色受想行識は無常であり、無我であり、一切行は無常であり、一切法は無我であると説いたが、彼の心境に進歩はなかった。

そこでチャンナはコーサンビー(Kosambī)のゴーシタ園(Ghositārāma)へ行ってアーナンダに会い、自分の心境を告げて教えを請うた。アーナンダは「かつて世尊がマハーカッチャーナ(Mahākaccāna)に教えられるのを聞いたことがある。世間は多く有と無によっているが、世間の集と滅を観察すれば有と無を離れた正見が生

じる。如来はこの2辺を離れて、無明によって行あり、……と説く」と。これを聞いてチャンナは「このような説こそ梵行者の所説である。私もまたアーナンダの説法を聞いて法を現観した」と語った。

『雑阿含』262 (大正02 p.066中、国訳01 p.029) : あるとき多数の上座比丘が波羅捺国の仙人住处鹿野苑に住していた。世尊が般涅槃されて間もない頃であった。そのとき闍陀が波羅捺城に入って乞食した後、あちこちの林や房や経行処を回って比丘らに教えを乞うた。比丘らは「色受想行識は無常、一切行は無常、一切法は無我、涅槃は寂静である」と説いた。

しかし彼は納得できなかつたので、拘睺弥国の瞿師羅園にいた阿難のところに行って教えを請うた。阿難は彼に「かつて世尊が摩訶迦旃延に語られるのを聞いたことがある。『如来は二辺を離れて中道を説く。これ有るが故にかれ有り、これ生ずるが故にかれ生ず、無明に縁りて行あり、乃至生老病死憂悲惱苦集まる。これ無きが故にかれ無し、これ滅するが故にかれ滅す、無明滅すれば則ち行滅し、乃至生老病死憂悲惱苦滅す』と説かれた」と告げた。闍陀はこの教えを聞いて遠塵離垢して法眼淨を得た。そして彼は阿難に「今、教えを聞いて、“一切行は皆空なり、皆悉く寂なり、不可得なり。愛尽欲離して滅尽涅槃す”ということに得心がいった」と語った。すると阿難は「あなたは今、大善利を得た。深甚の仏法のなかにおいて聖慧眼を得た」とほめた。2人の正士は展転して随喜し、座より立ってそれぞれの住处に戻った。

SN.035-129 (vol.IV p.113、南伝15 p.184) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときゴーシタ長者 (Ghosita gahapati) がアーナンダのもとを訪れ、「世尊はどのような界を説いておられるのでしょうか」と尋ねた。アーナンダは「眼と色と眼識と触によって生じる受を説いておられる」と解説した。

『雑阿含』460 (大正02 p.117下、国訳02 p.057) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。そのとき瞿師羅長者が阿難のもとにやって来て、「種々の界とはどのようなものか」と質問した。阿難は「眼界と色界、耳界と声界、鼻界と香界、舌界と味界、身界と触界、意界と法界はそれぞれ異なる存在であり、この眼界と色界乃至意界と法界に縁りて識が生じ、さらにこれら三事が和合して触を生じる。この場合、眼界と色界乃至意界と法界が喜処であれば樂受、憂処であれば苦受、捨処であれば不苦不樂受を生ずる」と答えた。瞿師羅長者は阿難の所説を聞いて歡喜して去った。

『雑阿含』461 (大正02 p.118上、国訳02 p.058) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。阿難も一緒であった。そのとき瞿師羅長者が阿難のもとを訪れ、「何が種々の界であるか」と質問した。阿難は「それは三界で、欲界と色界と無色界である」と答えた。長者は阿難の所説の経を歡喜して去った。

『雑阿含』462 (大正02 p.118上、国訳02 p.058) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。阿難も一緒であった。そのとき瞿師羅長者が阿難のもとを訪れ、「何が種々の界であるか」と質問した。阿難は「それは三界で、色界と無色界と滅界である」と答えた。長者は阿難の所説の経を歡喜して去った。

『雑阿含』463 (大正02 p.118中、国訳02 p.058) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅

園に住された。阿難も一緒であった。そのとき**瞿師羅長者**が阿難のもとを訪れ、「何が種々の界であるか」と質問した。阿難は「それは三種の出界である。欲界より出て色界に至り、色界を出て無色界に至り、一切諸行一切思想が滅する界（滅界）である」と答えた。長者は阿難の所説の経を歡喜して去った。

SN.035-192 (vol.IV p.165、南伝 15 p.262) : あるとき**アーナンダ**と**カーマブー** (Kāmabhū) はコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときカーマブーが夕方に独坐より出定し、アーナンダのもとにやって来て、「六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）が六境（色、声、香、味、触、法）の繫縛であるのか、あるいは六境が六根の繫縛であるのか」と質問した。アーナンダは「何れでもない。黒牛と白牛が縄でつながれているとき、黒牛が白牛の繫縛でもなく、白牛が黒牛の繫縛でもないように、両方を縁として生ずる欲貪が繫縛である」と答えた。

『雜阿含』559 (大正 02 p.146 中、国訳 02 p.146) : あるとき世尊は**波羅利弗妬路国**に住された。そのとき**阿難**と**迦摩**は波羅利弗妬路の**鷄林精舍**に住していた。ときに迦摩が阿難のもとにやって来て、「六根、六境があっても覚知しないのは、有想のためか、それとも無想のためか」と質問した。阿難は「六根、六境があっても、四禪定（初禪、二禪、三禪、四禪）、空入処、識入処、無所有入処を具えるものは有想にして覚知せず、無相心三昧を具えるものは無想にして覚知せず」と答えた。2人の正士は共に論議し、歡喜しあって座より立って去った。

SN.035-193 (vol.IV p.166、南伝 15 p.263) : あるとき**アーナンダ**と**ウダーイン** (Udāyin) はコーサンビーのゴーシタ園に住していた。ときにウダーインが夕方に独坐より出定し、アーナンダのもとにやって来て、「世尊の教えは、身 (kāya) も無我であると同様に識 (viññāṇa) も無我であるとするのか」と質問した。阿難は「そうだ」と答えて、「眼と色を縁として眼識が生じるが、その因と縁が滅するならば眼識は存在しないように身は無我である。斧をもって芭蕉を截り樹心を求めようとしても得られないようなものである。眼と色は繫縛ではなく、この両者を縁として生じる欲染こそが繫縛である」と説いた。

『雜阿含』248 (大正 02 p.059 中、国訳 01 p.201) : あるとき世尊は**波陀利弗多羅国**の**鷄林園**に住された。そのとき**阿難**が**大純陀**のもとにやって来て、「世尊は『四大所造色は我にあらず』と説かれた。『識も我にあらず』と説かれたのであろうか」と質問した。大純陀は逆に、「あなたは多聞である。私がわざわざ遠くからここへ来たのは、それを聞くためである。どうかその意味を教えてほしい」と尋ねた。そこで阿難は「眼と色を縁として眼識が生じる。眼・色は無常であり、これらが滅すれば識も滅する。したがって無我である。斧をもって芭蕉を截っても材として用いるものが得られないようなものである。このように眼識……意識をあるがままに観ずれば、執着がなくなり、解脱する」と説いた。2人の正士は共に法を説き、歡喜して本処に還っていった。

AN.003-008-072 (vol. I p.217、南伝 17 p.355) : あるとき**アーナンダ**はコーサンビー

のゴーシタ園に住していた。そのとき1人の在家のアーजीヴィカの弟子 (Ājīvaka-sāvaka) がやって来て、「誰の教えが善説者 (dhamma suvākāta) であるか、誰が妙行者 (supaṭipanna) で、誰が完成者 (sugata) であるか」と尋ねた。アーナンダは「貪・瞋・癡を断ずるために説く者は善説者である。それを断じるために修行する者は妙行者である。それを断じつくして未来に生じさせない者は完成者である」と説いた。アーजीヴィカの弟子は、「あなたははっきりと記説してくれた。これは未曾有のことであって、道理によって法を説き私見を交えない」と讃嘆し、三宝に帰依し、アーナンダを師として優婆塞となった。

『雑阿含』562 (大正02 p.147中、国訳02 p.148) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。阿難も一緒であった。そのとき瞿師羅長者が阿難のもとを訪れ、「どのような者が説法者であり、どのような者がよく向かい、どのような者がよく至るのか」と質問した。阿難は長者に、「貪欲と瞋恚と愚癡を調伏するならば世間の説法者と名づけ、調伏するに至ればよく向かうと名づけ、断じて余なければよく至ると名づける」と答えた。長者は阿難の所説を歡喜して去った。

AN.004-016-159 (vol. II p.144、南伝18 p.254) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのとき一人の比丘尼が病気に罹ったふりをして人を遣わし、「病氣見舞いに来て欲しい」と願い出た。そこでアーナンダはその比丘尼のもとを訪れ、頭を覆って横になっている彼女に、「世尊は『この身は食、愛、慢、姪欲より生じている。食、愛、慢は食、愛、慢に依って断じられるべきであるが、姪欲においてはあたかも橋を破壊する如く因縁を破壊しなければならない』と説かれた」と語ると、比丘尼は床より立ち上がってアーナンダの足に稽首し、「私の過罪を認容してください」と請うた。アーナンダはこれを受けた。

『雑阿含』564 (大正02 p.148上、国訳02 p.150) : あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。阿難も一緒であった。そのとき異比丘尼が阿難に恋著し、使いをやって、「私は病気で苦しんでいる、見舞いに来て欲しい」と伝言してきた。晨朝、阿難は彼女のもとに行くとき彼女は身体をあらわにして横たわっていたので、阿難は背を向けて坐った。これを見て比丘尼は懺悔して衣服を着けて坐った。阿難は彼女に、「この身体は穢食・憍慢・愛・姪欲に長養されている。これらを断じなければならない。車両に膏を塗るのはただ運転のためであり、皮膚病に酥油を塗るのは病いを治すためだと考えなければならない」と教誡した。比丘尼は遠塵離垢して法眼淨を得た。阿難は比丘尼のために種々に説法し、喜ばせて去った。

AN.004-017-170 (vol. II p.156、南伝18 p.275) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときアーナンダは比丘らに、「比丘と比丘尼を問わず、自分のもとにおいて (mama santike) 阿羅漢性を得たと明示する者は、観と止と止観と一境性に赴く4つの道の随一による」と説いた。

『雑阿含』560 (大正02 p.146下、国訳02 p.147) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。阿難も一緒であった。そのとき阿難は比丘らに、「比丘や比丘尼が私の前で自ら記別するならば、4つの道のいずれかによる」と告げて、止観に関する4

つの道を解説した。比丘らは阿難の所説を聞いて歡喜奉行した。

AN.005-017-170 (vol.III p.202、南伝 19 p.280) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのとき**具寿バツダジ** (Bhaddaji) がアーナンダのもとにやって来た。アーナンダがバツダジに、「何が見 (dassana)、聞 (savana)、楽 (sukha)、想 (saññā)、有 (bhava) の最上であるか」と質問すると、バツダジは「見の最上は梵天を見ること、聞の最上は極光浄天の楽なるかなという声を聞くこと、楽の最上は遍浄天の楽を受けること、想の最上は無所有処天、有の最上は非想非非想処天である」と答えた。そこでバツダジが多聞であるアーナンダに自らの考えを尋ねた。アーナンダは「見、聞、楽、想、有によって諸漏の尽がある。これが見、聞、楽、想、有の最上である」と説いた。

『雜阿含』484 (大正 02 p.123 中、国訳 02 p.075) : あるとき世尊は舍衛国の祇樹給孤独園に住された。**跋陀羅比丘**と**阿難**も一緒であった。そのとき阿難が跋陀羅のもとを訪ねて、「見第一、聞第一、楽第一、想第一、有第一とは何であるか」と質問した。跋陀羅は「梵天を見ること、喜樂の声を聞くこと、喜を離れる楽、無所有入処、非想非非想入処である」と答えた。阿難は跋陀羅の誤りを正し、「見、聞、楽、想、有によって諸漏を尽くすことである」と説いた。2 正士は共に論説し、座より立って去った。

AN.009-004-037 (vol.IV p.426、南伝 22 上 p.125) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときアーナンダは比丘らに、「世尊は衆生の清浄のため、涅槃の現証のために悟られた。世尊は眼・耳・鼻・舌・身があろうとも、その所縁 (色、声、香、味、触) と処 (認識の場) を感受しない、と説かれた」と説くと、**ウダーイン** (Udāyin) が「その処は有想にして感受しないのか、それとも無想なのか」と質問した。アーナンダがその両方を否定すると、ウダーインは「どんな想によって処を感受するのか」と質問した。そこでアーナンダは空無辺処、識無辺処、無所有処において感受しないと説いた。そして「あるとき私はサーケータ (Sāketa) のアンジャナ林 (Añjanavana) の鹿野苑 (migadāya)に住していた。そのとき**ジャティラーガーヒー** (Jaṭilāgāhī) **比丘尼**がやって来て、世尊は三昧にはどんな果があると説かれているのかと質問した。そこで『世尊は三昧は了知を果とする』と説かれたと答えたことがある。そのように想によって処を感受しないのである」と答えた。

『雜阿含』557 (大正 02 p.146 上、国訳 02 p.144) : あるとき世尊は拘睺弥国の瞿師羅園に住された。**阿難**も一緒であった。そのとき阿難のもとに**闍知羅比丘尼**がやって来て、世尊は無相三昧の果と功德についてどのように説かれているのかと質問した。阿難は「『智が果であり功德である』と説かれた」と答えた。比丘尼は「大師と弟子は同句、同味、同義である。昔、世尊が沙祇城の阿禪林に滞在されていたとき、多数の比丘尼たちが世尊のもとを訪れて、同様の質問をしたが、世尊は同じ答えをなされた。これは奇事なことである」と感嘆し、比丘尼は阿難の所説を歡喜して去った。

『雜阿含』558 (大正 02 p.146 中、国訳 02 p.144) : あるとき世尊は俱睺弥国の瞿師羅園に住された。そのとき無相心三昧を得たと称する異比丘が**阿難**のもとを訪れ、「世

尊は無相心三昧にどのような果と功德があると説いているのか」と質問した。そこで阿難が「あなたは無相心三昧を得ているのか」と質問すると、彼は黙然としていた。阿難は「智が無相心三昧の果であり功德である」と答えた。異比丘は阿難の所説を歡喜奉行した。

AN.009-005-042 (vol. IV p.449、南伝22上 p.157) : あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときウダーインがアーナンダのもとにやって来て、パンチャーラ・チャンダという天子 (Pañcāla-caṇḍa devaputta) の唱えた「大慧ある人は障礙 (sambādha) の処にも機会 (okāsa) を見る」という偈を取り上げ、「障礙とは何か、機会とは何か」と質問した。アーナンダは、「世尊は九次第定 (初禪、第二禪、第三禪、第四禪、空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処、想受滅) のなかに未だ解決されていないものを障礙といい、これらを具して住し、智慧を持って漏が尽きるのを機会というと言われた」と解説した。

[1-2] 舎衛城を阿難住処とするもの (コーサラ国とするものも含む)

DN.010 *Subha-s.* (須婆経 vol. I p.204、南伝6 p.291、片山・長部2 p.275) : あるとき阿難は舎衛城の祇樹給孤独園に住していた。世尊が般涅槃されてまだ間がない時であった (acira-parinibbute Bhagavati)。そのときトデーヤの息子のスバ青年 (Subha māṇava Todeyya-putta) がある用件のために舎衛城に滞在しており、アーナンダを招いた。アーナンダは「今は薬を服したところだから、明日にでも伺いましょう」と答え、翌朝、チェータカ比丘 (Cetaka bhikkhu) を随従沙門としてトデーヤのところに行った。スバ青年はアーナンダに、「尊者は長い間ゴータマ・ブッダに近侍されました。尊者ゴータマはどのような法を称賛され、どのようなところに入ることを勧められ、どのようなところに住させたのでしょうか」と質問した。阿難は「戒蘊と定蘊と慧蘊を称賛され、そこに入ることを勧められ、そこに住させられました」と説き、世尊が DN.002 *Sāmaññaphala-s.* (沙門果経) において説かれたこと (1) を説いた。スバ青年は三宝に帰依し、優婆塞となった。

(1) vol. I pp.062~085

SN.008-004 (vol. I p.188、南伝12 p.324) : あるときアーナンダは舎衛城の祇樹給孤独園に住した。そのときアーナンダはヴァンギーサを随従沙門 (pacchāsamaṇa) として舎衛城内 (1) を乞食したが、ヴァンギーサの心に不快の念が生じ、欲情が心を悩ませた。アーナンダは、「顛倒の想によりあなたの心は燃えている。欲情を呼び起こす美しき相を見るな。諸行は無常であり苦しみでありアートマンではないと見よ。不浄想によって心を修し、無相を修めよ。慢随眠を捨てよ。これを現観すれば寂靜となる」という偈を唱えた。

(1) SN.「有偈篇」の第8相応は「ヴァンギーサ長老相応 (Vaṅṅisa-thera-saṃyutta)」と名づけられ、この最初の経は「このように私は聞いた。ある時尊者ヴァンギーサはアーラヴィーのアッガーラヴァ・チェーティヤに、師なる尊者ニグローダカッパと共に住んでいた」という文章をもって始まる。しかしこの経は一転して上記文章に始まる。

『雜阿含』1214 (大正02 p.331上、国訳03 p.252) : あるとき世尊は舍衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき阿難は婆耆舍を伴にして舍衛城内を乞食したが、婆耆舍が女性を見て欲心を起こした。そこで阿難は「彼は顛倒想を以てその心を焼いている。淨想の貪欲を長養するを遠離して、当に不淨觀を修して常に一心を正受すべし。速やかに諸行の苦・空・非我なるを觀察し、厭離を修習して苦邊を究竟せよ」という偈を唱えた。婆耆舍は阿難の所説を歡喜奉行した。

『別訳雜阿含』230 (大正02 p.458上) : あるとき世尊は舍衛国・祇樹給孤独園に住された。そのとき婆耆奢は阿難と共に城内で乞食していたが、美しい女性を見て欲心を起こし、こんなことでは出家とはいえない、との思いを生じた。阿難は「不淨觀を修せよ、諸行の無常・苦・無我を觀察せよ。慢を断ずれば苦の辺際であろう」という偈を唱えた。

SN.016-010 (vol. II p.214、南伝13 p.314) : あるときマハーカッサパは舍衛城の祇樹給孤独園に住していた。そのときアーナンダは早朝にマハーカッサパのもとを訪れ、無理に誘って比丘尼たちの住居に行った。マハーカッサパが多数の比丘尼らに説法したが、トゥッラティッサー (Thullatissā) 比丘尼は喜ばず、「ヴェーデーハの聖者 (Vedehamuni) であるアーナンダの面前で説法するとは、針商人が針師に針を売ろうとするようなものだ」と非難した。アーナンダはマハーカッサパに、「忍んでください。女性は愚かなものである」と言った。マハーカッサパはアーナンダに、「あなたはサンガの中で世尊に、九次第定を得、五通を得ていると印可されたことがあったか」と尋ねると、アーナンダは「ない」と答えた。マハーカッサパは、「私は世尊からサンガの中で現法に漏を尽くし、心解脱・慧解脱を得たと印可された。あなたはターラ樹の葉で象を覆おうと考えるようなものだ」と語った。トゥッラティッサー比丘尼は梵行から退転した。

『雜阿含』1143 (大正02 p.302中、国訳03 p.411) : あるとき世尊は王舍城・迦蘭陀竹園に住され、摩訶迦葉と阿難は耆闍崛山に住していた。そのとき阿難は摩訶迦葉を誘って王舍城で乞食しようとしたが、時間が早かったので比丘尼精舎に立ち寄った。摩訶迦葉が比丘尼らに説法したが儼羅難陀比丘尼は喜ばず、「鞞提訶牟尼の前で説法するとは、針を売る児が針師のところで針を売ろうとするようなものだ」と悪言を吐いた。阿難はこれを聞いて「忍んでください、愚癡の老嫗のいうことですから」と言ったが、摩訶迦葉は心外に思い、「あなたは、私のように世尊に来て坐りなさいと半座を許されたことがあるか。また大衆の中で私のように漏尽通なるをもって世尊にほめられたことがあるか」と、比丘尼衆の中で師子吼した。

『別訳雜阿含』118 (大正02 p.417上) : あるとき世尊は王舍城の耆闍崛山・迦蘭陀竹林に住された。摩訶迦葉と阿難は耆闍崛山中にいた。そのとき阿難は摩訶迦葉を誘って王舍城へ乞食に出たが、時間が早かったので比丘尼精舎に立ち寄った。摩訶迦葉が比丘尼たちの前で説法したが、儼羅難陀比丘尼は「比提醯子牟尼の前で説法するとは、針売りが針師に針を売ろうとするようなものだ」と心に思った。これを天耳で聞いた摩訶迦葉は阿難に、「あなたは世尊から大衆の前で、四禪定・三明・六通を得た

と印可されたことがあるか」と師子吼して座を起って去った。

SN.021-002 (vol. II p.274、南伝 13 p.405、片山・相応部 4 p.471) : 舎衛城因縁 (Sāvattthi nidānaṃ) 。そのときサーリプッタは比丘らに、「独坐しているとき、私に"この世間における変易・変化により、愁いや悲しみを生ずるようなものは何もない"という思いが生じた」と告げた。そこでアーナンダが、「師主が変易・変化しても愁いや悲しみが生じないのか」と尋ねた。サーリプッタは「そうである。世尊が永くとどまられれば、人々の利益や幸福のためになり、世間の憐愍のためになったであろう」と答えた。

SN.022-083 (vol. III p.105、南伝 14 p.167) : あるときアーナンダは舎衛城の祇樹給孤独園に住していた。そのときアーナンダは比丘らに、「私たちが新参者であったころ、具寿ブンナ・マンターニプッタ (Puṇṇa-mantāniputta) は『色受想行識を執取するが故に我ありと計することになるが、執取しなければ我と計することはない。"色受想行識は無常なり"と観じて"更有を受けず"と了知する』と教誡してくれたものである。私もこの説法を聞いて法を現観した」と説いた。

『雑阿含』 261 (大正 02 p.066 上、国訳 01 p.028) : あるとき阿難は拘睺弥国の瞿師羅園に住していた。そのとき阿難は比丘らに、「私が年少にして出家したとき、尊者富留那弥多羅子は私に色受想行識が生じれば我なりとの計が生じる。色受想行識が生じなければ我なりとの計も生じない。鏡に自分の顔を映せば顔が生じるようなものである。それゆえ色受想行識は無常であり、苦であると観察すれば厭を生じ、離欲し、解脱するという教えを説いてくれた。これによって私は法眼淨を得た。そしてそれ以来、常にこの教えを四衆のために説いている」と説いた。

SN.028-001~9 (vol. III p.235~8、南伝 14 p.380~4) : あるときサーリプッタは舎衛城・祇樹給孤独園に住していた。そのときサーリプッタは早朝に乞食のために舎衛城に入り、アンダ林 (Andhavana) において食後の昼日住を過ごしてから、夕方に独坐より出定して祇樹給孤独園に戻った。アーナンダはサーリプッタが来るのを見て、「あなたの諸根や顔色は清浄です。今日はどんな定に住されたのですか」と尋ねると、サーリプッタは「初禪に住していた」と答えた。

……第2禪……

……第3禪……

……第4禪……

……空無辺処……

……識無辺処……

……無所有処……

……非想非非想処……

……想受滅……

SN.055-004 (vol. V p.346、南伝 16 下 p.226) : あるときサーリプッタとアーナンダは舎衛城の祇樹給孤独園に住していた。夕方、アーナンダはサーリプッタのもとを訪ね

て、「世尊はどのような法を具足している者を“預流者”と記別されたのですか」と質問した。サーリプッタは「四法である。すなわち仏と法とサンガにおいて不壊の淨信を具足し、戒を具足した者である」と答えた。

SN.055-013 (vol.V p.362、南伝16下 p.248) : あるときサーリプッタとアーナンダは舎衛城の祇樹給孤独園に住していた。夕方、サーリプッタはアーナンダのもとにやって来て、「世尊が預流者と記別されたのは、どのような法を断じ、どのような法を具足している者か」と尋ねた。アーナンダは「仏と法と僧伽と戒を誹謗する者は悪趣に墮す。これを誹謗しない者は善趣に生まれる。世尊は後者を“預流者”と記別されました」と答えた。

『雜阿含』844 (大正02 p.215下、国訳02 p.302) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき舍利弗が阿難のもとを訪れ、「世尊は、いくつの法を成就すれば須陀洹を得たと記説されたのか」と質問した。阿難は「世尊は、四法を成就した人を須陀洹を得たと記説された。仏と法と僧と戒に淨信を成就した人である」と説いた。2人の正士は共に論議しあい、隨喜して去った。

SN.055-027 (vol.V p.385、南伝16下 p.282) : 舎衛城因縁。そのとき給孤独居士 (Anāthapiṇḍika gahapati) が病気に罹って苦しんでいた。長者は使いを遣わしてアーナンダに来てもらった。早朝、アーナンダは長者の家を訪れて、「仏と法と僧において不壊の淨信があり、戒があると観るならば命終を恐れない」と説いた。居士は「自分はこれらを成就しており、後世のために命終を恐れない」と答えた。このときアーナンダは「あなたは幸いである。自ら預流果を記別した」と言った。

『雜阿含』1031 (大正02 p.269中、国訳03 p.050) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき阿難は給孤独長者が病気に罹っていると聞いて、長者の家へ見舞いに行き、「恐れること勿れ。仏と法と僧を信じず、戒を具さないから恐怖心が生ずる。だから四不壊淨を成就すべきです」と告げると、長者は「恐れるところはない。はじめて王舎城 (Rājagaha) の寒林 (Sītavana) で世尊を拝見して以来、四不壊淨を成就しています」と語った。阿難は「善哉、長者よ。あなたは自ら須陀洹果を得ていると記説した」と言った。長者は翌日の食事の供養をし、阿難は長者のために種々に説法し、歡喜させて去った。

AN.003-008-071 (vol.I p.215、南伝17 p.352) : 舎衛城因縁 (Sāvatti nidānaṃ) 。そのときチャンナという遊行者 (Channa paribbājaka) がアーナンダのところに来て、「貪欲や瞋恚や愚癡の過患を見て、これらの断を施設するのですか」と質問した。アーナンダは「貪心ある者は貪に被われて心の苦憂を感じ、貪が断たれば心の苦憂を感じない。瞋心ある者は瞋に被われて心の苦憂を感じ、瞋が断たれば心の苦憂を感じない。愚癡なる者は愚癡に被われて苦憂を感じ、愚癡が断たれば心の苦憂を感じない。これが私たちが『貪欲や瞋恚や愚癡の過患を見て、貪欲や瞋恚や愚癡の断を施設する』ということです」と答えた。さらにチャンナが「貪欲や瞋恚や愚癡を断ずるための道はあるか」と尋ねたので、アーナンダは「八聖道 (正見、正思惟、

正語、正業、正命、正精進、正念、正定)である」と答えた。

AN.010-001-007 (vol. V p.008、南伝 22 上 p.208) : **アーナンダ**は**サーリプッタ**のところに行って質問した。「地において地想なく、水において水想なく、……非想非非想処想……、他世において他世想なく、しかも有想であるという三昧を獲得したことがありますか」と。サーリプッタは「私はここ**舎衛国のアンダ林 (Andhavana)**において、そのような三昧を獲得したことがある。そのとき私に有の滅は涅槃である (**bhavanirodho nibbānaṃ**) という想が生じた」と答えた (1)。

(1) サーリプッタが「ここ舎衛城のアンダ林」というので舞台を舎衛城と推定した。

SN.009-005 (vol. I p.199、南伝 12 p.346) : あるとき**アーナンダ**は**コーサラ国**のとある森に住した。そのとき**アーナンダ**は長時に (**ativela**) 在家者に説法して住していた。**森に住む天神**が**アーナンダ**のためを思い、偈を唱えた。

ゴータマよ、心を涅槃に留めて禅思して放逸なるなかれ、雑談はあなたには用はない

と。**アーナンダ**はびっくりした。

『雑阿含』1341 (大正 02 p.369 下、国訳 03 p.389) : あるとき世尊は**舎衛国の祇樹給孤独園**に住された。そのとき**異比丘**が拘薩羅国のある林の中に住し、持戒を楽しみ功德を増長させることができなかった。**林に住む天神**が、「あなたは一向に持戒し、多聞を修習していない。独り静かに禅三昧し、閑居して遠離を修せよ」と偈で諫めた。彼はこれを聞いて、諸の煩惱を断じて阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』361 (大正 02 p.491 中) : そのとき**一人の比丘**が**俱薩羅国**の林に止住していた。彼は戒を持することに満足して、それ以上を求めなかった。**天神**が「あなたは未だ諸漏を尽くしていない、凡夫の法を遠離して菩提の樂を得よ」と偈を唱えた。

[1-3] 王舎城を阿難住処とするもの

MN.108 *Gopakamoggallāna-s.* (瞿曇目犍連経 vol. III p.007、南伝 11 上 p.356、片山・5 p.144) : ある時**アーナンダ**は**王舎城の迦蘭陀竹園**に住していた。**世尊**が**般涅槃**されて**間もない頃**であった。そのとき**マガダ王のアジャータサットウ王 (rājan Māgadha Ajātasatthu Vedehiputta)**が**ウツジェーニーのパッジョータ王 (rañño Pajjota)**を疑って**王舎城**を修復させていた。

ときに**アーナンダ**は乞食のために**王舎城**に入ったが時間が早かったので、**ゴーパーカ・モッガラナ (Gopaka Moggallāna)**という婆羅門のもとを訪れた。ゴーパーカは、「かの**ゴータマ正等覚者**が具足された一切の諸法を具足する弟子比丘はいますか」と質問した。**アーナンダ**は「いません。世尊は未だかつて生じたことのない道を生ぜしめ、知られたことのない道を知らしめ、説かれたことのない道を説かれたからです。しかしながら多くの弟子はその道に随順して具足し住しています」と答えた。

そのとき**マガダ国**の大臣**ヴァッサカーラ (Vassakāra)** **婆羅門**と**ウパナンダ將軍 (Upananda senāpati)**が工事を見回るついでにそこを訪れ、それまでの話を聞いて**アーナンダ**に、「それでは世尊が亡くなった後にあなたたちが所依たるべしとして推

薦された者はいないのですか」と質問した。アーナンダは「そういう者はいません。しかし私たちには所依すべき法すなわち、具戒して住する、多聞にして住する、衣食住に満足する、四禪を修するなどの十可喜法 (dasa pasādaniyā dhammā) があります」と答えた。これを聞いてヴァッサカーラ大臣はウバナンダ將軍に、「この尊者たちは尊敬し尊重すべきことを尊敬し尊重しています。しかし尊者たちが尊敬し尊重すべきことを尊敬し尊重しようとしないうちには、いったい何を尊敬し尊重して住すればよいのであろうか」と告げて、去っていった。

残ったゴーパカが私の質問に答えていませんという、アーナンダは「すでに答えました。多くの弟子はその道に随順して具足し住しています」と答えた。

『中阿含』145「瞿曇目犍連経」(大正01 p.653下、国訳05 p.291)：世尊が般涅槃された後、阿難は王舎城に住していた。そのとき摩竭陀国の大臣雨勢は跋耆族を防ぐために王舎城を補修していた。雨勢は田作人の瞿曇目犍連を遣わして竹林加蘭哆園へ行かせていた。ときに阿難は王舎城での乞食前に瞿曇目犍連の所へ行った。瞿曇目犍連は「比丘にして沙門瞿曇に等しい者があるか」と質問し、阿難は「そのような者はない」と答えた。そこへ雨勢がやって来てそれまでの会話を聞き、「世尊が般涅槃された後に、比丘らの依るべしとされた者はあるか」と質問した。阿難は「世尊の知見されたところをすべて知り、自分の涅槃の後に依るべしとされた者はないが、われわれは法により和合しており、世尊が尊敬すべしと説かれた十法(持戒、博聞、善知識に親近すること、遠離、宴坐、知足、正念、精勤、興衰の法を観ずること、無漏解脱)を尊敬している」と答えた。そのとき衆中にあった婆難大将が「竹林加蘭哆園は住みよい所である。伺を行じ、伺を楽しむからだ」と言った。

雨勢大臣が去ったとき、瞿曇目犍連が阿難に「あなたは自分の質問にまだ答えていないと言ひ、「三解脱(如来の解脱、慧解脱、阿羅漢の解脱)に差別があるのか」と質問した。阿難は「差別はない」と答えた。瞿曇目犍連は阿難に食事を供養した。大臣雨勢、梵志瞿曇目犍連は阿難の所説を歡喜奉行した。

『中阿含』220「見経」(大正01 p.803下、国訳06 p.383)：世尊が般涅槃された後、阿難は王舎城の竹林加蘭哆園に住した。そのとき阿難の出家前の友である一人の異学の梵志が阿難のもとにやって来て、「沙門瞿曇は、世間が常であるか無常であるか、世間は無限であるか有限であるか、生命と身体は同一であるかないか、死後如来の身は終わるか終わらないか、あるいは終わるのでもなく終わらないでもないか、ということについて通説しないのか」と質問した。阿難は「世尊はそのような問題について通説されない」と答えた。異学梵志は「私は今阿難に帰依します」といった。阿難は「私に帰依するのではなく、私が仏に帰依するようにあなたも帰依しなさい」と告げた。梵志は「私は自ら仏・法・比丘衆に帰依します。願わくば世尊(唯願世尊)⁽¹⁾、私を受けて優婆塞としてください」といった。彼は阿難の所説を歡喜奉行した。

(1) 世尊が眼前におられなくとも、あるいはこの経のように在世でなくとも、このようにあたかも世尊が眼前におられるように帰依するのが信仰者の態度であるということがわかる。

失訳『邪見経』(大正01 p.917上)：ある時阿難は羅閱祇城の迦蘭陀竹園に住していた。

世尊が般涅槃されて久しからざる時であった。そのときある異学邪命の婆羅門がやってきて、「沙門瞿曇は世間の有常無常などについて説くのは邪見であって、それを記説されなかったというが、それがなぜ邪見なのか」と質問した。阿難は世尊は如来等正覚であるからだと答えた。婆羅門は「阿難に帰す」というと、阿難は「私のように世尊に帰依しなさい」と説いた。婆羅門は三宝に帰し、五戒を守ることを誓って世尊の優婆塞となった。邪命婆羅門は阿難の所説を歓喜し楽しんだ。

SN.016-011 (vol. II p.217、南伝 13 p.318) : あるときマハーカッサパは王舎城の迦蘭陀竹園に住していた。そのときアーナンダは多数の年少比丘らと共に南山 (Dakkhiṇāgiri) へ遊行に出た。ところがそのとき 30 人ほどの比丘が還俗し、残ったのは童子 (kumārabhūta) ばかりとなってしまった。

アーナンダが戻ってくると、マハーカッサパは「どうして食に節制がなく、夜に坐禅することに熱心でない年少の比丘らと遊行に出たのか。思うにあなたは量を知らない年少の童子のようなものだ」と咎めた。アーナンダは「頭髪も灰色になった者が童子と呼ばれるのは心外だ」と反論した。

これを聞いたトゥッラナンダー比丘尼 (Thullanandā bhikkhuni) は、「もと外道であったマハーカッサパに、どうしてヴェデーハの牟尼 (Vedehamuni) であるアーナンダが咎められなければならないのか」と言った。マハーカッサパはこの言葉を聞いてアーナンダに、「私は出家してから世尊以外に師と仰いだことはない。私は王舎城とナーランダールの間にあるバフプッタ・チエーティヤ (多子制底: Bahuputta cetiya) において、『世尊は我が師で、私は世尊の弟子である』と宣言して世尊の弟子となった⁽¹⁾。また私の着ていた衣服と世尊が着ておられた糞掃衣を交換していただいたことにより法の後継者 (dhammdāyāda) となり、九次第定、五通を得、解脱した」と語った。トゥッラナンダー比丘尼は梵行より退転した。

(1) これがマハーカッサパの具足戒とされる。【論文 25】森章司「サンガと律蔵諸規定の形成過程」の第 2 節「具足戒の種類と名称」(「モノグラフ」第 18 号 p.35 以下) 参照

『雑阿含』1144 (大正 02 p.302 下、国訳 03 p.413) : あるとき阿難と摩訶迦葉は王舎城の耆闍崛山に住していた。世尊が入滅されて久しからざる時であった。そのとき飢饉が起こり乞食できなくなったので、阿難は行儀の伴わない年少比丘と共に南天竺 (後の部分では「南山国土」という) に遊行したが、30 人の年少比丘が還俗して童子ばかりになってしまった。

遊行から帰った阿難は耆闍崛山にいる摩訶迦葉のところを訪ねた。摩訶迦葉は「あなたは童子のごとく量を知らない」と非難した。阿難は「頭髪が二色になった者を童子と呼ぶとは」と反論した。低舎比丘尼がこれを聞いて、「どうして本外道が毘提訶牟尼を童子と呼ぶのか」と謗った。そこで迦葉は、「私は自ら出家してから異師を知らない。王舎城と那羅聚落の中間の多子塔所において『世尊は我が師、私は世尊の弟子』と宣言して弟子となった。私は世尊の糞掃衣と衣服を交換して法を付属された」と語った。阿難は摩訶迦葉の所説を歓喜奉行した。

『別訳雑阿含』119 (大正 02 p.417 下) : そのとき世尊はまさに涅槃しようとしてい

た（爾時如来将欲涅槃）。そのとき**阿難**と**摩訶迦葉**は王舎城の耆闍崛山にいたが、飢饉で食が得られなかったので、阿難は行儀の伴わない新学の比丘をつれて南山聚落に遊行した。このとき30余人が還俗してしまった。遊行から帰った阿難は王舎大城耆闍崛山にいる摩訶迦葉を訪ねた。

摩訶迦葉は「徒衆を破壊するとは、あなたは無智な小児のようだ」と非難した。阿難は「私はすでに年邁している。小児というとは」と反論した。**帝舎難陀比丘尼**はこれを聞いて、「本外道が比提醯牟尼を小児というとは」と謗った。そこで摩訶迦葉は、「出家してこのかた異趣あることはない。私は王舎大城と羅羅健陀の中間の多子塔において『世尊は我が師、私は世尊の弟子』と宣言して弟子となった。私は世尊の糞掃衣と衣服を交換して法を付属された」と語った。阿難は「いつも尊者を尊敬している」といい、2人は共に歓喜しあつて去った。

『四分律』「比丘尼健度」（大正22 p.930上）：**阿難**は500人の比丘を連れて**摩竭提国**を遊行した。そのとき60人の年少弟子が還俗してしまった。王舎城に帰った阿難を見て、**摩訶迦葉**は「此衆欲失、汝年少不知足」と非難した。阿難は「大徳我頭白髮已現。云何於迦葉所猶不免年少耶」と反論した。この会話を聞いていた**儵蘭難陀比丘尼**は「摩訶迦葉是故外道、何故数罵阿難言是年少」と言い、翌朝にはつばを吐きかけた。

SN.047-029 (vol.V p.176、南伝16上 p.407)：あるとき**アーナンダ**は王舎城の迦蘭陀竹園に住していた。そのとき**シリヴァッダ居士** (Sirivaddha gahapati) が病に罹って重病となった。居士は使者を遣わしてアーナンダに来てもらった。アーナンダは居士の家を訪れ、四念処を修せよと説いた。居士は「修しています。私には五下分結はすべて断じられています」と答えた。アーナンダは「あなたは幸せです。自身で不還果を得ていると記しました」と告げた⁽¹⁾。

(1) この経は『雑阿含』1035 (大正02 p.270中、国訳03 p.053)に相当すると思われる。ただし阿難は登場せず、主人公は釈尊である。経の内容は以下のとおりである。

あるとき世尊は波羅捺国・仙人住处鹿野苑に住された。そのとき**婆藪長者**が病気で苦しんでいたのを、これを聞いた**世尊**は、達摩提那長者修多羅に広説するが如し。阿那含果の記を得、座より起って去られた。

なお1033経には達摩提離長者という人物が登場する。これが達摩提那長者修多羅に相当するのなら、ここには四不壊浄（仏、法、僧、戒）によって六念（念仏、念法、念僧、念戒、念施、念天）が修せられるべきことが説かれている。

SN.047-030 (vol.V p.178、南伝16上 p.409)：あるとき**アーナンダ**は王舎城の迦蘭陀竹園に住していた。そのとき**マーナディンナ居士** (Mānadinna gahapati) が病に罹って重病となった。彼は使者を遣わしてアーナンダに来てもらった。**アーナンダ**は居士の家を訪れ、以下SN.047-029に同じ⁽¹⁾。

(1) この経は『雑阿含』1038 (大正02 p.270下、国訳03 p.054)に相当すると思われる。ただし主人公は阿那律である。経の内容は以下のとおり。

あるとき世尊は瞻婆国の竭伽池の側に住された。そのとき**摩耶提那長者**は病気が快復したので、**阿那律**をのぞいて使者を派遣して、食事に招待した。翌朝、阿那律が長者の家を訪れると、長者は門で出迎えていた。彼が「病気の時、どのように苦痛を癒したのか」

と尋ねると、長者は「四念処の教えを实践した」と答えた。このとき阿那律は長者に「汝は自ら阿那含果を記した」と告げた。その後、阿那律は食事の供養を受け、説法してその場を立ち去った。

AN.010-010-096 (vol. V p.196、南伝 22 下 p.112) : あるとき**アーナンダ**は**王舎城のタポータ園 (Tapodārāma)**に住していた。そのとき**アーナンダ**が**タポータ川**で手足を洗っていると、**コーカヌダ**という**遊行者 (Kokanuda paribbājaka)**がやって来て、「あなたは世間は常住であるという見解をとるのですか、それとも無常であるという見解をとるのですか。また世間は有辺であるという見解をとるのですか、それとも無辺であるという見解をとるのですか、……以下如来の死後についてまで……」と質問した。**アーナンダ**は、「そのような見解はとりません。そのような見解は成見 (ditṭhigata) です」と答えた。遊行者は**アーナンダ**の名前を聞き、「あなたが具寿**アーナンダ**と知っていたらこのような質問しませんでした。お許してください」と言った。

『増一阿含』023-002 (大正 02 p.611 下、国訳 08 p.221) : あるとき世尊は500人の比丘と共に**羅闍城の耆闍崛山中**に住された。そのとき**婆拘盧**は一山曲にいて故衣を繕っていた。彼はすでに阿羅漢を得ていたが世事に著せず、人のために法を説こうとしなかった。そこで**釈提桓因 (帝釈天)**がやって来て、「どうして法を説かないのか」と尋ねた。**婆拘盧**は「**仏・舍利弗・阿難・均頭槃** (1) はよく妙法を説き、世尊は賢聖は黙然たるべしと教えられた」と答えた。**釈提桓因**は遥かに**世尊**に叉手し、帰命した後、「むかし世尊は種姓は違っても法を説けば、皆ともに受持して果を成ずると説いてくださった」と言い、**婆拘盧**の所説を歡喜奉行した。

(1) 3本は「均頭葉」とする。

[1-4] **パータリプッタ** (いずれも**鷄林精舎**)を**阿難**住処とするもの

SN.045-018 (vol. V p.015、南伝 16 上 p.165) : あるとき**アーナンダ**と**バツダ (Bhadda)**は**パータリプッタの鷄林精舎 (Pāṭaliputta Kukkuṭārāma)**に住していた。そのとき**バツダ**が夕暮れに独座より起って、**アーナンダ**のもとを訪ね、「何が非梵行 (abrahmacariya) ですか」と質問した。**アーナンダ**は「非梵行とは八支邪道 (aṭṭhaṅgika micchāmagga 邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪命、邪精進、邪念、邪定) です」と答えた。

SN.045-019 (vol. V p.016、南伝 16 上 p.166) : **パータリプッタ**因縁 (Pāṭaliputtanidānaṃ) 。そのとき**バツダ**は**アーナンダ**に、「何が梵行ですか。また何が梵行の究竟ですか」と質問した。**阿難**は「梵行とは八支聖道 (正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定) であり、梵行の究竟とは貪欲と瞋恚と愚癡の滅尽である」と答えた。

SN.045-020 (vol. V p.016、南伝 16 上 p.167) : **パータリプッタ**因縁。そのとき**バツダ**が**アーナンダ**に、「何が梵行ですか。また何を梵行者とし、何を梵行の究竟とする

のですか」と質問した。アーナンダは「八支聖道が梵行であり、これを成就する者が梵行者であり、貪欲と瞋恚と愚癡の滅尽が梵行の究竟である」と答えた。

SN.047-021 (vol. V p.171、南伝 16 上 p.398) : あるとき**アーナンダ**と**バツダ** (Bhadda) はパータリプッタの鶏林精舎に住していた。そのときバツダが夕暮れに独座より起って、アーナンダのもとを訪ね、「どうして世尊は善戒 (kusala sila) を説かれたのですか」と質問した。アーナンダは「四念処を修習させるためです。何が四であるかと言えば、身の身観念に住し、受の受観念に住し、心の心観念に住し、法の法観念に住することです」と答えた。

『雑阿含』628 (大正 02 p.175 中、国訳 02 p.183) : あるとき世尊は巴連弗邑の鶏林精舎に住され、**優陀夷**と**阿難陀**も一緒であった。そのとき優陀夷が阿難陀のもとを訪ね、「どうして世尊は聖戒を説かれたのですか」と質問した。阿難陀は「四念処を修習するためです。何が四であるかと言えば、身の身観念に住し、受の受観念に住し、心の心観念に住し、法の法観念に住することです」と答えた。2人の正士は論議しあって本処に還った。

SN.047-022 (vol. V p.172、南伝 16 上 p.400) : (因縁は SN.047-021 に同じ) そのとき**バツダ**が**アーナンダ**に、「如来が入滅されたのち、何の因と縁があって正法が久しく住しなかつたり、住したりするのですか」と質問した。**アーナンダ**は、「四念処を修習しなければ正法は久しく住しない、しかし四念処を修習すれば正法は久しく住する」と答えた。

SN.047-023 (vol. V p.173、南伝 16 上 p.401) : パータリプッタの鶏林精舎。**バツダ**が**アーナンダ**に、「何の因と縁があって正法が損滅したり、損滅しなかつたりするのですか」と質問した。アーナンダは「四念処を修習しないから正法は損滅し、これを修習すれば正法は損滅しない」と答えた。

『雑阿含』629 (大正 02 p.175 中、国訳 02 p.184) : あるとき世尊は巴連弗邑の鶏林精舎に住され、**阿難**と**跋陀羅**も一緒であった。そのとき跋陀羅が阿難に、「若し教えを多く修習すれば、退転しないであろうか」と質問した。阿難は「四念処を修習すれば行者を退転させない。何が四であるかと言えば、身の身観念に住し、受の受観念に住し、心の心観念に住し、法の法観念に住することである」と答えた。2人の正士は論議しあって本処に還った (1)。

(1) この経とともに以下の3経も内容が微妙に異なるから、SN.047-023の対応経とすべきではないかもしれない。しかし住処と登場人物を同じくし、四念処が取り上げられているので対応経扱いとした。

『雑阿含』630 (大正 02 p.175 下、国訳 02 p.184) : あるとき世尊は巴連弗邑の鶏林精舎に住され、**阿難**と**跋陀羅**も一緒であった。そのとき跋陀羅が阿難に、「もし教えを多く修習すれば、不浄なる衆生は清浄となり、転じて光沢を増すのですか」と質問した。阿難は、「四念処を修習すれば清浄となる」と答えた。2人の正士は論議しあって本処に還った。

『雑阿含』631 (大正 02 p.175 下、国訳 02 p.184) : あるとき世尊は巴連弗邑の鶏林精

舎に住され、**阿難**と**跋陀羅**も一緒であった。そのとき跋陀羅が阿難に、「もし教えを多く修習すれば、未だ彼岸にわたることができない衆生を、彼岸にわたすことができるのですか」と質問した。阿難は「四念処を修習すれば、彼岸にわたすことができる」と答えた。2人の正士は論議しあって本処に還った。

『雜阿含』632 (大正02 p.175下、国訳02 p.185) : あるとき世尊は巴連弗邑の鷄林精舎に住され、**阿難**と**跋陀羅**も一緒であった。そのとき跋陀羅が阿難に、「もし教えを多く修習すれば、阿羅漢となれるのですか」と質問した。阿難は「四念処を修習すれば、阿羅漢になることができる」と答えた。2人の正士は論議しあって本処に還った。

[1-5] ヴェーサーリーを阿難住処とするもの

MN.052 *Aṭṭhakanāgara-s.* (アッタカ城人経 vol. I p.349、南伝10 p.100、片山・中部3 p.053) : あるとき**アーナンダ**はヴェーサーリーの竹林村 (Beluvagāma)に住していた。そのとき**アッタカ城の住人 (Aṭṭhakanāgara)**の**ダサマ居士 (Dasama gahapati)**が用あって**パータリプッタ (Pāṭaliputta)**へ赴いたとき、鷄林精舎 (Kukkutārāma)にいた一人の比丘を訪ね、その比丘からアーナンダの所在を聞いてアーナンダのもとにやって来た。

アーナンダは長者に四禅、四無量心、空無辺処、識無辺処、無所有処の教えを説いた。ダサマ長者はパータリプッタとヴェーサーリーの比丘サンガに食事を供養した後、各比丘に一衣と阿難に三衣を与え、さらにアーナンダのために500僧房を建立した。

『中阿含』217「八城経」(大正01 p.802上、国訳06 p.378) : 仏が般涅槃されて久しからざる時であった。そのとき多数の比丘らが波羅利子城に遊行して雞園に住していた。このとき**第十居士八城**が波羅利子城に来て商売し、多いに財を得たので歡喜踊躍して雞園を訪れた。居士は比丘らの説法を聞いた後、**阿難**が毘舍離の獼猴池の辺にある高樓台觀にいることを聞いて、さっそく阿難のもとへ行った。

阿難は居士のために十二甘露法門(四禅、四無量心、四無色定)を説いた。居士は阿難をはじめ、毘舍離と雞園の比丘らを一堂に招待して食事の供養をし、食後に阿難に500種の物を施すと、阿難はこれらを四方僧伽に施与した。居士は阿難の所説を聞いて歡喜奉行した。

安生高訳『十支居士八城人経』(大正01 p.916上) : あるとき諸々の上座比丘が波羅梨弗都盧城の雞園に住していた。世尊が般涅槃されてから久しからざる時であった。そのとき**十支居士八城人**が商売によって多いに財を得たので喜んで、雞園の上座比丘のところに行って法を聞き、**阿難**が毘舍離の獼猴水の近くにいることを知って阿難のところに行った。

阿難は居士に十二甘露法門を説き、喜んだ居士は雞園の比丘と毘舍離の比丘を食事に招待し、房を買って阿難に施与した。阿難は四方僧伽に施与した。十支居士八城人は阿難の所説を歡喜し楽しんだ。

AN.011-002-017 (vol. V p.342、南伝22下 p.323) : あるとき**アーナンダ**はヴェーサーリーのバールヴァ村に住していた。そのとき**アッタカ城の住人のダサマ長者**がある

用事でパータリプッタへ行った時、鷄林精舎にいた一人の比丘を訪ねてアーナンダの所在を聞き、アーナンダのもとにやって来た。

アーナンダは長者に四禪、四無量心、空無辺処、識無辺処、無所有処の教えを説いた。ダサマ長者はパータリプッタとヴェーサーリーの比丘サンガに食事を供養したあと、各比丘に一衣とアーナンダに三衣を与え、さらにアーナンダのために500僧房を建立した。

『中阿含』039「郁伽長者経」巻下（大正01 p.481中、国訳04 p.190）：世尊が般涅槃されて久しからざるあるとき、多数の比丘らが鞞舍離の彌猴池の辺にある高楼台觀に住した。そのとき郁伽長者が大施を行い遠来の客や病人などに食事を与え、日に20衆、5日ですべての比丘僧伽を食事に招待するなど多くの布施をしていた。ところが船が大海で沈没して百千の価直を一時に失った。これを聞いた長老比丘らが、「長者の布施を止めさせよう」と話し合っ、その役を仏の侍者であった阿難に依頼した。翌朝、阿難は衣鉢を持して長者の家に向かうと、長者は阿難の姿を見て家に招き入れた。阿難が用件を告げると長者は、「すべての財物が尽きようとも転輪聖王の願いのように我が願いを満たさせて欲しい」と答えた。阿難が「転輪聖王の願いとは何か」と質問すると、長者は八未曾有法（①出家して阿羅漢果を成就すること、②比丘を尊敬すること、③比丘を差別しないこと、④天の声によらず自らの淨智によること、⑤～⑧初禪乃至四禪を得ること）について語った。長者は阿難を食事に招待し、自ら食事の接待をした。食後に阿難は居士のために説法し、長者は阿難の所説を聞いて歡喜奉行した。

AN.003-008-074 (vol. I p.220、南伝17 p.360)：あるときアーナンダはヴェーサーリーの大林重閣講堂に住していた。そのときリッチャヴィ族のアバヤ (Abhaya ricchavi) とパンディタクマーラカ (Paṇḍikakumāraka ricchavi) がやって来て、「ニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta) は『苦行によって古き業を滅し、新しき業を作らない。その故に一切の苦を滅する』と説くが、世尊はどのように説くのか」と質問した。アーナンダは「世尊は涅槃を作証するために具戒、四禪、無漏の心解脱・慧解脱の教えを説かれる」と答えた。これを聞いてパンディタクマーラカがアバヤに、「君はどうして具寿アーナンダの善説を随喜しないのか」と告げると、アバヤは「私が随喜しないはずがない。随喜しない者は頭が裂けるだろう」と言った。

[1-6] コーリヤ城（釈迦国）を阿難住処とするもの

AN.004-020-194 (vol. II p.194、南伝18 p.342)：あるときアーナンダはコーリヤ城 (Koliya) のサープーガ (Sāpūga) と名づけるコーリヤ族たちの町に住していた。そのとき多数のサープーガに住するコーリヤ族の人たちがアーナンダのもとにやって来た。アーナンダは彼らに、「世尊は涅槃を作証するために四精勤支（①戒清淨のための精勤支、②心清淨のための精勤支、③見清淨のための精勤支、④解脱清淨のための精勤支）を説かれた」と述べて、各々の精勤支を解説した。

[1-7] 阿難住処を記さないもの

AN.004-018-179 (vol. II p.167、南伝 18 p.292) : あるとき**アーナンダ**が**サーリプッタ**のところへ行って、「ある者はいかなる理由によって現法において般涅槃しないのですか」と質問した。サーリプッタは「順退分の想 (*hānabhāggīyā saññā*)、順住分の想 (*ṭhitibhāggīyā saññā*)、順精進分の想 (*visesabhāggīyā saññā*)、順決択分の想 (*nibbedhabhāggīyā saññā*) を如実に知らないからである。如実に知れば現法において般涅槃する」と答えた。

AN.005-017-169 (vol. III p.201、南伝 19 p.279) : そのとき**アーナンダ**は**サーリプッタ**のところへ行って、「どのようにすれば善法を速やかに理解し、よく覚え、覚えたものを忘れないか」と質問した。サーリプッタは「あなたは多聞である。あなた自身の弁才をもって説いてください」と言った。アーナンダは「義・本文・文・訓釈詞・連絡に巧みであれば速やかに理解し、よく覚え、覚えたものを忘れない」と説いた。サーリプッタは「アーナンダは奇特であり、未曾有である」とほめた。

AN.006-005-051 (vol. III p.361、南伝 20 p.111) : あるとき**アーナンダ**は**サーリプッタ**のところへ行って、「どのようにすれば未聞の法を聞き、聞いたことのある法を忘れないか」と質問した。サーリプッタは「あなたは多聞である。あなたこそ私に説いてください」と言った。アーナンダは「多聞にしてアーガマを伝え、法と律とマーティカーを持す長老比丘の住する住処にすみ、尋ねることです」と答えた。サーリプッタは「アーナンダは奇特であり、未曾有である」とほめた。

AN.010-001-005 (vol. V p.006、南伝 22 上 p.204) : **アーナンダ**は、比丘らに「破戒の者は懺悔の拠り所を破壊し、……解脱知見の拠り所を破壊する。持戒の者は懺悔の拠り所を具足し、……解脱知見の拠り所を具足する」と説いた。

AN.011-001-005 (vol. V p.316、南伝 22 下 p.285) : **アーナンダ**は、比丘らに「破戒の者は懺悔の拠り所を破壊し、……解脱知見の拠り所を破壊する。持戒の者は懺悔の拠り所を具足し、……解脱知見の拠り所を具足する」と説いた⁽¹⁾。

(1) 内容は上記 AN.010-001-005 と同じ。

[2] 以上が、阿難が登場し釈尊が登場しない経のすべてである。これからの考察に関係のある情報を中心に表にまとめておく。

[2-1] 表は次のような凡例に基づいて作成されている。

- ① 「経名」欄にはパーリの経名を挙げ、これに対応ないしは相応する漢訳経名を1字下げにして示す。また経名は経番のみとし、ANはAN.003-008-072のように3つの数字の領域で示したが、ここでは中間の-008-にあたる部分 (*vagga*) は省略する。
- ② 「説法」欄には、それぞれの経で阿難が説法する立場にあるもの、あるいは質問を受ける立場にあるものについては○を付し、また逆の説法を聞き質問する立場にあるものには×を付す。
- ③ 「仏在処」欄には釈尊の在処を記す。地名はパーリ語のカタカナ表記に統一する。記

入のないものは仏在処が記されていないものである。そもそもここに紹介した経は釈尊が登場しない経なのであるから仏在処が記されていないはずであるが、それにもかかわらず仏在処が記されるものもあるので、それを記すわけである。この意味については後に検討する。

- ④「登場人物」欄には登場するアーナンダ以外の人名を記す。話題にあがるのみの人物は記さない。人名はパーリ語のカタカナ表記に統一する。
- ⑤「備考」欄には、経の説時を示唆する記事や、この経の説時を想定する手掛かりとなりそうな情報を記す。地名はパーリ語のカタカナ表記に統一する。ただし舍衛城、王舎城は漢訳語を示す。また大きな地名に含まれる祇樹給孤独園などの地名は省略する。ただしパータリプッタのみは例外であるが、この理由は後に明らかになるであろう。

[2-2] アーナンダが登場し釈尊が登場しない経の一覧表

経名	説法	仏在処	登場人物	備考
コーサンビー				
MN.076	○	コーサンビー	遊行者サンダカ	釈尊は現存する
『雑阿含』973	○	コーサンビー	遊行者サンダカ	
『別訳雑阿含』207	○		遊行者サンダカ	
『雑阿含』783	○	コーサンビー	異婆羅門	
SN.051-015	○		ウンナーバ婆羅門	
『雑阿含』561	○	コーサンビー	異婆羅門	
SN.012-068	×		比丘ムシーラ 比丘サヴィッタ 比丘ナーラダ	
『雑阿含』351	×			阿難住処：舍衛城
SN.022-090	○		比丘チャンナ	
『雑阿含』262	○		比丘チャンナ	仏入滅後久しからず
SN.035-129	○		ゴーシタ長者	
『雑阿含』460	○	コーサンビー	ゴーシタ長者	
『雑阿含』461	○	コーサンビー	瞿師羅長者	
『雑阿含』462	○	コーサンビー	瞿師羅長者	
『雑阿含』463	○	コーサンビー	瞿師羅長者	
SN.035-192	○		比丘カーマブー	
『雑阿含』559	○	パータリプッタ 鶏林精舎	比丘カーマブー	阿難住処：パータリプッタ 鶏林精舎
SN.035-193	○		比丘ウダーイン	
『雑阿含』248	○	パータリプッタ 鶏林精舎	大純陀	阿難住処：パータリプッタ 鶏林精舎
AN.003-072	○		アージーヴィカ	
『雑阿含』562	○	コーサンビー	瞿師羅長者	

阿難が登場し釈尊が登場しない経の説時推定

AN.004-159	○		1人の比丘尼	
『雑阿含』564	○	舎衛城	異比丘尼	阿難住処：舎衛城
AN.004-170	○			
『雑阿含』560	○	コーサンビー		
AN.005-170	○		比丘パッタジ	
『雑阿含』484	○	舎衛城	比丘パッタジ	阿難住処：舎衛城
AN.009-037	○		比丘ウダーイン比丘尼ジャティラーガーヒー	
『雑阿含』557	○	コーサンビー	比丘尼ジャティラーガーヒー	
『雑阿含』558	○	コーサンビー	異比丘	
AN.009-042	○		比丘ウダーイン	
舎衛城				
DN.010	○		スバ青年 比丘チェータカ	仏入滅後久しからず
SN.008-004	○		比丘ヴァンギーサ	
『雑阿含』1214	○	舎衛城	比丘ヴァンギーサ	
『別訳雑阿含』230	○	舎衛城	比丘ヴァンギーサ	
SN.016-010	×		比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラティッサ	
『雑阿含』1143	×	王舎城	比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラティッサ	阿難住処：王舎城
『別訳雑阿含』118	×	王舎城	比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラティッサ	阿難住処：王舎城
SN.021-002	×		比丘サーリブッタ	
SN.022-083	○			
『雑阿含』261	○			阿難住処：コーサンビー
SN.028-001～9	×		比丘サーリブッタ	
SN.055-004	×		比丘サーリブッタ	
SN.055-013	○		比丘サーリブッタ	
『雑阿含』844	○	舎衛城	比丘サーリブッタ	
SN.055-027	○		アナータピンディカ居士	
『雑阿含』1031	○	舎衛城	アナータピンディカ居士	
AN.003-071	○		遊行者チャンナ	
AN.010-007	×		比丘サーリブッタ	
SN.009-005	×		天神	
『雑阿含』1341	×	舎衛城	天神	主人公は阿難ではなく異比丘

阿難が登場し釈尊が登場しない経の説時推定

『別訳雑阿含』361	×		天神	主人公は阿難ではなく一比丘
王舎城				
MN.108	○		ゴーパーカ・モッガラーナ 婆羅門 ヴァッサカーラ婆羅門 ウパナンダ將軍	仏入滅後久しからず 阿闍世王が王舎城を修復していた
『中阿含』145	○		ゴーパーカ・モッガラーナ 婆羅門 ヴァッサカーラ婆羅門 ウパナンダ將軍	仏入滅後久しからず 阿闍世王が王舎城を修復していた
『中阿含』220	○		一異学梵志	仏入滅後久しからず
SN.016-011	×		比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラナンダー	
『雑阿含』1144	×		比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラナンダー	仏入滅後久しからず
『別訳雑阿含』119	×		比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラナンダー	仏がまさに涅槃されようとしていた
『四分律』	×		比丘マハーカッサパ 比丘尼トゥッラナンダー	
SN.047-029	○		シリヴァッダ居士	
SN.047-030	○		マーナディンナ居士	
AN.010-096	○		遊行者コーカヌダ	
『増一阿含』 023-002	○	王舎城	比丘婆拘盧 舍利弗 均頭槃	仏滅後か？
パータリプッタ鶏林 精舎				
SN.045-018	○		比丘バツダ	
SN.045-019	○		比丘バツダ	
SN.045-020	○		比丘バツダ	
SN.047-021	○		比丘バツダ	
『雑阿含』628	○	パータリプッタ	比丘優陀夷	
SN.047-022	○		比丘バツダ	仏入滅後が話題とされる
SN.047-023	○		比丘バツダ	仏入滅後が話題とされる
『雑阿含』629	○	パータリプッタ	比丘跋陀羅	
『雑阿含』630	○	パータリプッタ	比丘跋陀羅	
『雑阿含』631	○	パータリプッタ	比丘跋陀羅	
『雑阿含』632	○	パータリプッタ	比丘跋陀羅	

阿難が登場し釈尊が登場しない経の説時推定

ヴェーサーリー				
MN.052	○		ダサマ居士	比丘らはパータリプッタの鶏林精舎にいた
『中阿含』 217	○		ダサマ居士	仏入滅後久しからず 比丘らはパータリプッタの鶏林精舎にいた
『八城人経』	○		ダサマ居士	仏入滅後久しからず 比丘らはパータリプッタの鶏林精舎にいた
AN.011-017	○		ダサマ居士	比丘らはパータリプッタの鶏林精舎にいた
『中阿含』 039	○		郁伽長者	仏入滅後久しからず
AN.003-074	○		リッチャビ族のアバヤ バンディタクマーラカ	
コーリヤ城				
AN.004-194	○			
舞台を記さず				
AN.004-179	×		比丘サーリプッタ	
AN.005-017-169	○		比丘サーリプッタ	
AN.006-005-051	○		比丘サーリプッタ	
AN.010-001-005	○			
AN.011-001-005	○			

[2-3] 上記表から読み取れる情報を統計的にをまとめてみる。

①この表に取り上げた経の総数：86 経

②これらの経におけるアーナンダの住処

コーサンビー：27 経

舎衛城：21 経

王舎城：13 経

ヴェーサーリー：6 経

パータリプッタ：13 経

コーリヤ城：1 経

記入なし：5 経

③アーナンダが説法し、あるいは質問に答える経：69 経

④仏在処を記す経：29 経

パーリ：1 経

- 漢 訳：28 経
 ⑤ 仏入滅後を明示する経：10 経
 パーリ：2 経
 漢 訳：8 経
 ⑥ 仏滅後の経とも考えられる経：3 経

[3] 以上の情報を元に、アーナンダが主要な役割で登場して、釈尊が登場しない経の分析をしてみたい。

[3-1] まず釈尊が登場しないのに「仏在処」が記される経が気にかかる。このような経は上記④に記したように 29 経あるが、実はそのうちの 28 経が漢訳であって、パーリには 1 経しかない。

その 1 経は MN.076 であって、ここではこれを釈尊が登場しない経として扱ったが、実はこれには少し問題がある。なぜならこの経には確かに現前には釈尊が登場しないのであるが、アーナンダの教えに感激したサンダカという遊行者が自分の衆たちに、「沙門ゴータマには梵行住がある (samaṇe Gotame brahmacariyavāso)、彼のもとへ行け」と告げ、自分の衆 (saka parisā) を世尊の梵行のもとへ赴かせた、としている。したがって経の編集者は、釈尊は現前に登場しないけれども釈尊は存命であったという認識を持っていたかもしれない。

ところがこれに対応する『雑阿含』973 と『別訳雑阿含』207 には、この部分の文章はないし、『別訳雑阿含』207 については仏在処さえ記されていない。また原始経典には釈尊が現存されなくとも、あたかも現前に釈尊がいますが如く表現されることがある。例えば『中阿含』220「見経」がそれであって、これには「釈尊が般涅槃された後久しからざるあるとき」とされているから釈尊はすでに亡くなっていて現存されないのであるが、異学梵志が「私は今阿難に帰依します」というと、阿難は「私に帰依するのではなく、私が仏に帰依するように、あなたも帰依しなさい」と告げた。そこで梵志は「私は自ら仏・法・比丘衆に帰依します。願わくば世尊 (唯願世尊)、私を受けて優婆塞としてください」と言った、とされている。この例に見られるように、MN.076 が釈尊のもとに行き行って帰依せよというのは、実は現実に存在する釈尊ではなく釈尊の教えの元に行き行って帰依せよという意味とも理解できる。筆者はこのように理解して、ここではこの経を釈尊が登場しない経として取り上げたのである。

したがってこれを除けば、釈尊が登場しないのに仏在処が記されるというのは漢訳経のみということになり、この仏在処が記される 28 経のうち 17 経にはパーリの対応経があるが、これらにはすべて仏在処が記されていないから、釈尊が登場しないのに仏在処が記されるというのは漢訳経の特徴ということができる。

なぜこのように実際には釈尊が登場しないのに仏在処が記されているのかその理由はよくわからない。本来の伝承では仏在処が記されていなかったにかかわらず、それが漢訳される際に阿難の住処に引きずられたか、あるいは本「モノグラフ」に併載した【資料集 8】「パーリ「経蔵」の六事と仏在処一覧」に記したように、経の冒頭部分の表現の形式化によるのではなかろうか。このように考えると、阿難が主な役割を担って登場し釈尊が登場しない漢訳の経には、本来は「仏在処」は記されていなかったということになる。

本稿では阿難が登場し、釈尊が登場しない経を対象として調査したのであるが、このことは、パーリの経に仏在処が記されていないにもかかわらず、その対応ないしは相応する漢訳経に仏在処が記されている他の経にもいえるのではないかと思われる。

[3-2] パーリの経蔵の中では、その冒頭部分に「仏入滅後久しからざるころ (aciraparinibbute bhagavati)」と明示する経は DN.010 と MN.108 の 2 経のみである。前者について註釈書 (aṭṭhakathā) は、「仏滅 1 月後にアーナンダが祇園精舎の釈尊の遺品を整理しに舎衛城に戻った時」⁽¹⁾ とし、後者について同じく註釈書では、「舍利分配を行ったのち法の結集を行うために王舎城にやって来た時のこと」⁽²⁾ としている。あるいはパーリの註釈家たちの認識ではこれ以外の経はすべて釈尊生前の経であるということであったのかもしれない。

しかしながらほかにも仏滅後の経であるとしか考えられない経がある。例えば MN.084 *Madhura-s.*⁽³⁾ は、マハーカッチャーナがマドゥラー王のアヴァンティプッタに、「世尊は今すでに般涅槃された (parinibbuto kho, mahārāja, etarahi so bhagavā araham sammāsambuddho)」と語っているし、MN.094 *Ghoṭamukha-s.*⁽⁴⁾ でも同じく「世尊は今すでに般涅槃された」とし、登場人物の婆羅門が「すでに般涅槃された釈尊と法と比丘僧伽に帰依した (parinibbutam pi mayan taṃ bhavantam gotamaṃ saraṇam gacchāma dhammañ ca bhikkhusaṃghañ ca)」とされている。

また MN.124 *Bakkula-s.*⁽⁵⁾ では、この経の主人公の尊者バククラ (āyasmā Bakkula) が「出家して 80 年 (asīti vassāni pabbājitassa)」と語ったとされている。もし釈尊のもとで出家してから 80 年というのなら、釈尊成道と同時に出家したとしても、これは入滅後 35 年のことでなければならない⁽⁶⁾。

また DN.023 *Pāyāsi-s.*⁽⁷⁾ や本稿で扱った MN.052 などは、その対応経が仏滅後の経と明示しているので、仏滅後の経であることは明らかである⁽⁸⁾。

このように経の冒頭部分に「仏入滅後久しからざるころ (aciraparinibbute bhagavati)」と明記されていなくとも、経の内容から仏滅後の経であることが明らかなものがあり、このような表現のみにとらわれることなく、もっと多くの仏滅後の経がありうることを前提に考えなければならないであろう。

(1) 「片山・長部 2」 p.275 註 2

(2) 「片山・中部 5」 p.144 註 4

(3) 摩偷羅経 vol.II p.083、南伝 11 上 p.111

(4) 瞿哆牟伽経 vol.II p.157、南伝 11 上 p.209

(5) 薄拘羅経 vol.III p.124、南伝 11 下 p.149、片山 5 p.384

(6) この経は「本モノグラフ」に併載した【研究ノート 11】「懲罰羯磨制定年の推定」で扱った。

(7) 弊宿経 vol.II p.316、南伝 7 p.365、片山・長部 2 p.269

(8) 「片山」の DN.023 の註には、「仏滅後に起ったこと」としている（「長部 4」 p.269）。ただしこれが何によっているのか確認できていない。

[3-3] 漢訳経を含めると、「仏が入滅されてから久しからざる時」と明示する経が 10 経ある。そしてこの記述を対応経ないしは相応経でこのような趣旨が記されていない経にも適用すると、その数は **13 経** に増える。さらに仏滅後の経ではないかと推測されるものも含

めると、さらに**3 経**がプラスされて合計**16 経**になる。ここに紹介した経の総数は上述のように86 経であるから、仏滅後の経であると考えられるものの割合は18.6%となる。

またアーナンダの住処をパータリプッタとするものが13 経（表のパータリプッタの11 経にコーサンビーの2 経が加わる）と多く、しかもこのパータリプッタはすべて鶏林精舎である。

いうまでもなくパータリプッタは後にはマガダ国の首都となったところであるが、『涅槃経』によれば釈尊が最後の旅でここを通られたときには、まだ阿闍世王による城砦の建設途中であって、この城砦には門やガンジス河を渡る渡し場さえ建設されていなかった。そこで釈尊もそのときには次のようなところに住されたとされる。

DN.016 *Mahāparinibbāna-s.* (vol. II p.084, 南伝 07 p.045) : 「私たちの休憩所 (no āvasathāgāra) 」

『長阿含』002「遊行経」(大正 01 p.012 上、国訳 07 p.059) : はじめ「巴陵樹下」に坐され、人びとは「尋いで如来のために大堂舎(講堂)を起てた」。

白法祖訳『仏般泥洹経』(大正 01 p.162 上) : はじめ「巴隣聚の樹下」に坐し、次に「阿衛聚の一樹下」に坐された。

Mahāparinirvāṇasūtra (p.144, 中村・上165) : 「私たちの休憩所 (asmākan āvasatha) 」

失訳『般泥洹経』(大正 01 p.177 下) : はじめ「巴連弗の城外の神樹の下」に坐し、次に「阿衛聚の一樹下」に坐された。

パータリプッタにはいまだ僧院は建設されていなかったからである。

このようにアーナンダや他の比丘たちがパータリプッタの鶏林精舎に住したという経は、明らかに釈尊入滅後の経であることを意味するものと考えてよい。それはヴェーサーリーがアーナンダの住処とされる経の中で、そのとき比丘らはパータリプッタの鶏林精舎に住んでいたとする経が4 経あり、そのうちの2 経は仏入滅後久しからずと明記していることから証明される⁽¹⁾。

このようにパータリプッタをアーナンダの住処とするものも仏滅後の経に加えると、仏滅後の経であることを示唆する経は29 経（仏滅後の経：16 経、パータリプトラを住処とする経：13 経）ということになり、総数86 経のうちの実に33.7%は仏滅後の経ということになる。

(1) 『十誦律』「衣法」(大正 23 p.201 上) からそれがわかる。

[3-4] 本稿は阿難が登場し、釈尊が登場しない経を調査したのであるが、その調査項目の一環として阿難が法を説いているか否かを調査した。その統計が③であって、阿難が説法しあるいは質問に答える経は69 経であって、総数86 経の80.2%にあたる。

なぜこのような調査をしたかといえ、阿難は王舎城の第1 結集の直前まで阿羅漢果を得ていなかったとされるが、もし法を説いているとするなら、阿羅漢果を得た以降でなければならぬのではないかと考えたからである。しかしながら法を説くといっても、「釈尊はこの問題に対してはどのように説かれているのですか」という、多聞第一としての阿難に釈尊の教えを尋ねるといった内容のものも少なくない。とはいえその問答は、必ずしも阿難にプロンプターのように釈尊の言葉を鸚鵡返しに答えてもらうことを期待していたようでもない、このようなものも阿難が法を説いていると理解し

た。

一方、阿羅漢果を得ていない者には法は説けないのか、という問題も存する。例えば「律藏」では、「無学の戒蘊 (asekha silakkhandha)、無学の定蘊 (asekha samādhikkhandha)、無学の慧蘊 (asekha paññākkhandha)、無学の解脱蘊 (asekha vimuttikkhandha)、無学の解脱知見蘊 (asekha vimuttiñāṇa- dāssanakkhandha) を具足しない者」は具足戒を与え、依止を与え、沙弥を蓄えてはならないとされている⁽¹⁾。ただしこれは理想論ないしは建前論であって現実論ではないであろう。それが証拠に『四分律』や『五分律』『十誦律』『僧祇律』にはこれに相応する部分はない。『根本有部律出家事』⁽²⁾にはその条件として「戒成就」「多聞成就」「勝解脱成就」「証智勝解脱成就」「智慧成就」という五法成就が説かれているが、しかし他の現実的条件のなかの1種の五法成就である。

といってもこれは、具足戒を与え、依止を与え、沙弥を蓄えるというまさしく現実的・日常的な資格要件として論じられているのであって、「法を説く」というまさしく理念・理想が求められる次元においては、無学の戒・定・慧・解脱・解脱知見を得ていることが求められるのは当然のようにも思える。

このように説法の資格を厳格に考えるとすれば、阿難が法を説く経はすべて仏滅後ということになる。

(1) vol. I p.062、南伝3 p.109 以下

(2) 大正23 p.1031 中

[3-5] 以上のように、状況証拠によるところが多いが、阿難が登場し釈尊が登場しない経は釈尊入滅後の経である確率が高いということになる。

とはいいいながら、このなかには舍利弗が登場する経が9経含まれている。舍利弗は釈尊が入滅される前に亡くなっているのであるから、サーリプッタが登場するならその経は仏在世中の経ということになる。このうちの7経はパ・漢の対応経・相応経のない経であって、パ・漢相応するのは1組の経（併せて2経）のみであるから、文献の信頼レベルからいえばそう高くないのであるが、しかし「とにかく聖典のいうところを信頼してみよう」というわれわれの基本的立場からすれば、これを無視することはできない。

またこのなかにはヴァンギーサが女性を見て欲情を起こしたという内容の経も含まれている。われわれはヴァンギーサは釈尊が69歳の時に阿羅漢果に達したと考えている⁽¹⁾のであるから、この経は釈尊が69歳以前のものでなければならない。

このように経の説時は、主に登場人物など他の要素も勘案して1つ1つの経を個別に考えなければならないのであるが、本稿の調査による限り、舍利弗や凡夫としてのヴァンギーサが登場する経を除けば、阿難が登場し釈尊が登場しない経は、原則的に釈尊入滅後の経としてもよいのではないかと考えられる。

(1) 【研究ノート3】森章司「詩人ヴァンギーサ (Vaṅḡisa) の生涯」(「モノグラフ」第19号 2014年9月) 参照

[4] 余談であるが、阿難が登場し釈尊が登場しない経が原則として釈尊入滅後の経であるとすれば、これらの経は阿難の釈尊入滅後のありさまを表わしているとみることができる。

[4-1] まず第1に注意されることは、このような経の舞台としてコーサンビーが飛び抜

けて多いことである。本稿に扱った全 86 経のうち、コーサンビーを阿難の活動舞台とするものは 27 経であるから、全体の 31.4% を占める。しかもこれらにはすべてサーリプッタやヴァンギーサが登場しないのであるから、そのすべては釈尊滅後の経ということになる。ちなみに全 86 経の中にサーリプッタやヴァンギーサが登場するものは 12 経あるから、これらは仏在世中の経であると考えて、これらを除くと仏滅後の経は全部で 74 経ということになり、これに対する割合は実に 36.5% となる。

この数字からみると、阿難の釈尊入滅後の主な活動地はコーサンビーであったことが推測される。釈尊在世中から阿難とコーサンビーが特別な関係にあったことはすでに【論文 19】「コーサンビーの仏教」⁽¹⁾で指摘しておいたが、これが証明されたことになる。チャンナは梵壇事件が物語るようにもともとコーサンビーと密接な関係があったのであるが、SN.022-090 や『雑阿含』262 はバーラーナシーの鹿野苑にいたチャンナがコーサンビーにいた阿難を訪ねたとするようになり、仏滅後は阿難が取って代ってコーサンビーの主というような形になったのではなかろうか。

(1) 森章司・本澤綱夫著、「モノグラフ」第 14 号 2009 年 5 月を参照されたい。

[4-2] 舎衛城を舞台とするものも 21 経あってけっして少なくないが、これらの経のうち 9 経にはサーリプッタやヴァンギーサが登場するから、釈尊滅後の経としては 12 経しかないことになる。もちろん舎衛城も釈尊滅後の阿難の活動地の 1 つであったであろうが、必ずしも主たる活動地とはいえないということになるであろう。

[4-3] 王舎城を阿難住処とする経は 13 経であるが、そのうち 6 経にマハーカッサパとトゥッラナンダー比丘尼が登場する。これらはおそらく釈尊入滅後に行われた結集の直後だったのではないかと想像される。『別訳雑阿含』119 は「仏がまさに涅槃されようとしていた時」とするから、あるいは入滅直前であったかもしれない。そしてマハーカッサパと阿難は釈尊の生前からか、あるいは結集を契機としてなのかよくわからないが、その間に何らかの確執があったようである。それは【論文 8】「摩訶迦葉 (Mahākassapa) の研究」⁽¹⁾に書いたとおりである。

また MN.108=『中阿含』145 は「仏滅後久しからざるとき」で、阿闍世王が「ウッジエーニーのパッジョータ王 (rañño Pajjota) を疑って王舎城を修復させていた」とするから、これも文字どおり釈尊入滅後久しからざるときであったであろう。

王舎城は少なくとも釈尊入滅時には、ここで大勢の比丘たちが 3 ヶ月間も住して結集を行うのに最適の地であったのであろうが、パータリプッタに城が完成し、都市機能が具わったときに、マガダの首都はここに遷されたのであろう。それにとまって王舎城の存在価値は失われ、それとともに仏教教団にとっての価値も低下せざるをえなかった。阿難が王舎城で活動したのは、仏滅直後のみであって、その後はあまり訪れることもなかったのではなかろうか。

(1) 森章司・本澤綱夫著、「モノグラフ」第 9 号 (2004 年 5 月) p.108 以下参照

[4-4] これに対してパータリプッタを阿難住処とする経が 13 経あり、加えて阿難がヴェーサーリーにいたとき比丘らがパータリプッタに住していたという経が 4 経あるから、合計 17 経がパータリプッタすなわち鶏林精舎に言及されていることになる。

鶏林精舎が建設されたのは首都がパータリプッタに遷された後のことであり、それがきつ

かけとなってにわかにはパータリプッタが仏滅後の仏教の教団活動の中心都市として登場し、それに伴って阿難の活動地ともなったということが推測される。

これに関連してヴェーサーリーを阿難住処とする6経の中の4経はパータリプッタに言及するから、釈尊在世中のヴェーサーリーの地位は王舎城と舎衛城を結ぶ中継地としての役割が大きかったのであろうが、仏滅後はパータリプッタにもっとも近い大都市としての役割に変わってきつつあったと推測される。